「夢か現実か」

小学五年生のときに転校していった女の子と高校で再会するなんて運命的だと思わないか？

思うよな？

え、思わない？

でも、僕は思ったんだよ。これは運命だって。

今だから言えることだが、小学校のとき僕は実際彼女のことが好きだった。彼女も僕のことを好きだという噂を聞いたことがあった。告白をして付き合うなどの行為はなかったが、両想いのような感覚は互いにあったと思う。

でも、彼女は転校してしまったのだ。

彼女の転校はあまりにも急なことだった。だから、僕は彼女が最後に登校する日に風邪を引いてしまい、彼女が次の日学校に行ったらもういないということすら、次の日学校に行ってから知ったのだった。

だから、それを知ったとき僕はとてもショックだった。

それでもたかが小学生の恋だ。そんなに長くは引きずらなかった。小学校を卒業して、中学に入学する頃には彼女のことなんてまるで頭になかった。新生活に追いつくのに手いっぱいだった。

高校生になって入学式のとき彼女の名前が呼ばれたときはそれは驚いた。もちろん、彼女がこの辺りに戻ってきていたことにも驚いたがそれ以上に名前を聞いただけで彼女のことが昔の記憶からスッと出てきたことに自分が一番驚いた。

その時の僕には、変な自信があった。

僕が彼女のことを覚えているということは、必然的に彼女も僕のことを覚えているだろうと。

入学式が終わって自分のクラスに移動した後に、彼女と同じクラスだと知ってますます運命を感じた。

席はあまり近くなかったけれど。

僕は入学式で話しかけられてから松田という男子と教室まで来ていた。

彼女の席は僕の席から左三人挟んだところだった。

彼女は丁度一人で席に座っていたので僕は、松田に一言告げてから彼女に声をかけようした。

すると、その時担任が教室に入ってきて高校初めての朝礼が始まった。

何ともタイミングが悪い。

担任は朝礼の最後に一人ずつ簡単な自己紹介をするように言った。

僕は彼女のことを意識してひと際大きな声で自分の名前を言って今ハマっていることなどを少し話して自己紹介を終えた。

僕は彼女の反応を見るために横目で彼女を盗み見た。

彼女は固まっていた。眉一つ動かさずじっと空を見つめていた。

ただその体は少し震えているようにも見えた。

僕は気のせいだと思い、この朝礼が終わった後彼女になんて声をかけるかをずっと考えていた。

「じゃあ、明日から授業だから気合い入れろよー」

担任のその言葉を最後に、朝礼は終わった。

みんなそれぞれにこれから高校生活を過ごす友達を確保するために互いに声を掛け合っている。

僕は松田と連絡先を交換した。松田はこの後家族と用事がある

らしく急いで教室を出ていった。
彼女を見ると、また一人だった。
僕は鞄を持って真っ先に彼女の席へ向かった。
「西原」
と彼女の名前を呼んでみた。
彼女は一瞬固まったように見えたが、すぐにこちらの方を向いて僕の顔を見てこう言った。
「間宮……だよね？　小学校一緒だった」
覚えていた。
「ああ、久しぶりだな。こっち戻ってきてたんだ」
「うん。最近ね」
「まさか、西原と同じ高校になるだなんて思ってなかったよ」
「私も。まさか間宮がこの学校にいると思わなかったよ。この学校結構な進学校じゃない？　そこそこ偏差値高いし」
「何だよそれ。馬鹿にしてるのか？」
「してない、してない。ただ、私の小学校の記憶だったら間宮ってあんまり勉強好きじゃなさそうなイメージだったから」
「だから、馬鹿だと思ってたってことだろ？」
「うん、まあ、そうだね」
「お前ぇ……」
こんな風にまた軽口を叩けるなんて。まるで、小学校の頃に戻ったかのようだった。
僕は彼女ともっと話がしたくなり、一緒にどこかに寄って帰ろうと誘った。彼女は少し考えたようだったが了承してくれて二人で駅前のファミレスに行くことになった。

ファミレスでは、彼女は期間限定のパフェを頼んでいた。
僕は少しお腹が空いていたのでポテトフライを頼んだ。
今日は僕が誘ったということで僕が奢ると申し出た。彼女は申し訳なさそうな顔をしていたが、僕が奢ると言い張ったので渋々奢らせてくれることになった。すると彼女はドリンクバーで僕の分も飲み物を取ってくると席を立とうとしたので、僕も一緒に行こうとしたら奢ってもらうならこれくらいさせてほしいと一人で行ってしまった。
時間を確認したくて店内を見回すが、多分時計が掛かっているであろう壁にこの席からだと柱で見えなかったので、スマホで確認しようとポケットから出すと一通メールが届いていた。
松田からだ。
『今日一緒に帰れなくてごめんな！　また今度帰ろうぜ』
僕はすぐに返信した。
『大丈夫だよ。用事はもう済んだのか？』
返信はすぐに返ってきた。
『ああ。おかげさまで間に合ったよ。お前はもう家に帰ったのか？』
『いや、今同じクラスの西原とファミレスにいる』
僕がその返信をし終えたときに、彼女は帰ってきた。
僕はスマホをポケットにしまった。
僕は彼女にお礼を言って入れてきてもらった烏龍茶を一口飲んだ。
それから少しして、頼んでいた物も運ばれてきた。
僕たちはそれらを食べながら、会っていなかった期間の話をしていた。それが途中からだんだん、僕が一方的に話して彼女は微笑みながら僕の話に時々相槌をうってくれるという状況になっていた。
二人ともお皿がだんだん空になってきた頃、僕は一つ気になっていたことを彼女に訊いた。

そして、僕は数分後これを彼女に訊いたことに後悔をするのだった。
「西原、君は小学生のときに写真家になりたいって言ってたよね？　今もその夢は変わってないの？」
彼女はパフェの一番下の層のコーンフレークをすくっていた手を止めた。
先程からずっとにこやかな笑みを浮かべていた彼女の顔は今日一番に感情のない顔になった。
僕は何か変なことを訊いてしまったのかと思い、内心焦っていた。
「そ、そりゃあ、何年も経てば夢とか変わるよな」
フォローしたつもりだった。でも、逆にそれが彼女の逆鱗に触れてしまったのだった。
「間宮……それ、本気で言ってる？」
「え？」
そう言った彼女の顔は真っ直ぐにこちらを睨んでいた。
「ど、どうしたんだよ」
彼女は肩を震わせながらこう言った。
「写真家？　なりたいわよ。なれるものならね！　この脚がこんな風になってなければ！　なりたかったわよ！」
脚？どういうことだ。
僕はなぜこんなにも彼女が怒っているのかが分からなくて混乱していた。
「脚ってどういうことだ？　何かあったのか・？」
彼女は信じられないといった表情で僕の顔を見ている。
「どういうことですって？　よくそんなことがいえるわね！　この脚の怪我のせいで長時間歩くことさえ出来ないのに。写真家なんて。笑えるわね」
僕はますます訳が分からなかった。
「脚を怪我してるのか？」
「ええ、そうよ。あなた達のせいでね！」
「あなた達って、誰のことだ？」
「本当に分からないの？」
「ああ……」
彼女はしばらく呆然としてから微かに唇を動かしてこう言った。
「よく思い出して。私が転校する前日のことを」
僕は記憶を駆け巡らせてある一つの結論にたどり着いた。
「まさか――」

彼女が転校する前日。
僕はクラスの友達と一緒にいつもと同じ公園で野球をしていた。
その日は天気が悪くもう少しで雨が降りそうな雲だった。
すると、一人の大柄な男子が打った球が公園から飛んでいってしまったのだ。
その時、球が飛んでいった方向からパリーンという音が聞こえたのだ。
その場にいた全員の顔が青ざめていった。
みんなが呆然と立ち尽くしているとポツ、ポツと雨が降ってきた。
その雨は次第に酷くなり、雷が大きな音を立てて落ちたのが聞こえた。
その瞬間、全員が一目散に公園から走り出した。
みんなは口々に「俺は悪くない！」「俺だって悪くねえよ！」と言いながら公園から逃げたのだ。
僕もつられて走り出し、家まで帰ろうとしたのだが先程の罪悪

感が急に襲ってきて、公園に引き返した。
その公園周辺の家を探しまわったが、雨が酷く、視界が悪くて球が当たったであろう家を探し出すことが出来なかった。
家に帰るときには、びしょ濡れになっていた。
次の日、僕は熱を出して学校を休んだのだ。
まさか、あの時球が当たってそのせいで割れた窓ガラスで怪我をした人がいるだなんて想像もしていなかった。

『西原って誰だ？　そんなやつクラスにいなかっただろ』

「――思い出した？」
彼女の声で僕は我に返った。
「ああ……君はあの時の球が窓に当たったせいで怪我をしたのか？」
彼女は小さく頷いた。
「ええそうよ……」
僕はなんてことをしてしまったんだ。
知らないうちに人の人生をぶち壊して、挙句の果てに高校で再会したことを運命だなんて。
「ごめん……本当にごめん。今更謝ったって遅いのは分かってる。でも、ごめん」
僕は机に頭が付くぐらい頭を下げて謝った。
しばらくの沈黙の後、彼女は呟いた。
「もういいよ。その言葉だけで十分」
彼女の声が少し笑っていた気がしたので僕は顔をパッと上げた。
そこに彼女の姿はなかった。
呆然としている僕のポケットのスマホがメールを受信した。